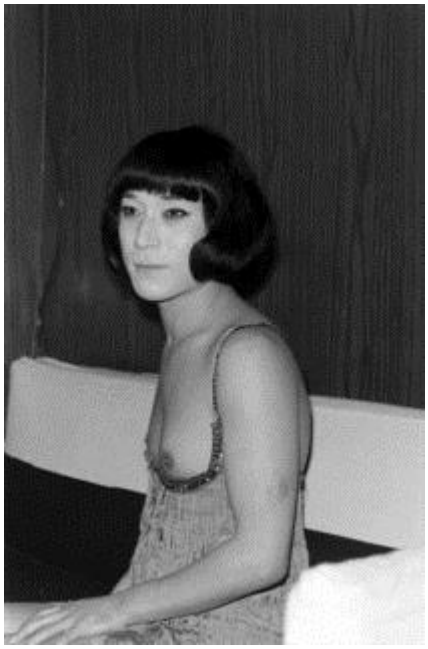
流しの写真屋　渡辺克巳展

1965～　歌舞伎町 - 新宿二丁目

【静かなる面魂ｻﾗﾀﾞ ﾏｼｲ】

2011/04/26　- 06/05



printing　[011.04watanabe_k.pdf]

一本の樫の木 やさしそのなかに 血は立ったまま眠れるものを 寺山修司

1960 年代の終わり、騒然としていた新宿駅に背を向けるように、赤線･青線跡地の闇夜に立つ人々を撮り続けた男がいた。

写真屋稼業で食うための写真は、指の先っちょで露出するのではなく、相手と地つづきに繋がる足の裏で撮るんだと云わんばかりに。

太古の昔から定着しえない人々の、クールではかない陰影を切りとった写真家、渡辺克巳の写真展。

経歴

1941　**岩手県盛岡市生まれ**

1965　**歌舞伎町で手札 1 組 200 円のポートレイト写真の請負を稼業とする「流しの写真屋」を始める**

1973　**カメラ毎日アルバム賞を「新宿・歌舞伎町」で受賞/「新宿群盗伝 66/73」**(薔薇画報社)

1974　**「初覗夜大伏魔殿」**(荻窪シミズ画廊)

焼き芋屋で食い繋ぐ

1976　**写真スタジオ経営**

1980　「SHINJUKU'80」(新宿マーガレット) /**「真夜中のストリートエンジェル」**(銀座ニコンサロン)

1981　**写真スタジオ閉店**

新宿にて路上の人となる

1982　**「新宿群盗伝伝」・「ディスコロジー」**(晩声社)

1985　**「渡辺克巳の新宿 20 年」**(銀座ニコンサロン)

1993　**「ごちゃまぜ天国」**(コニカフォトギャラリー 東京・大阪・名古屋)

1997　**「新宿 1965-97」**(新潮社)

2001　「Hot Dog」(ワイズ出版)

2006　**1 月 29 日逝去**

2006　「KATSUMI WATANABE」**写真展**「Gangs of Kabukicho」**写真集**(ｱﾝﾄﾞﾘｭｰ・ﾛｽ・ｷﾞｬﾗﾘｰ NY)

2008　**「流しの写真屋 渡辺克巳」**(ワタリウム美術館)

2011　**「渡辺克巳 新宿、インド、新宿」4 月刊行**(ポット出版)

サンフランシスコ MoMA 美術館収蔵

写真／流しの写真屋 渡辺克巳「ユリちゃん」

新宿に死んだ無頼のブリコルール

　世の中には「ゴミ」と呼ばれる人たちがいる。ゴミはすでにその役目を終えたもの、いわゆる「用なし」だ。

この一枚の白黒写真にある女は「ユリちゃん」と呼ばれ、新宿で働いていた娘だ。ユリちゃんは「ヒモ」と呼ばれる男に撲殺された。殴り殺したヒモもゴミのように殺されたユリちゃんも、表社会には用なしだ。その用なしな人たちを撮り続けた写真屋がいた。写真屋は裏の新宿を流しながら、路上に棄てられ靴底で踏みにじられた吸殻や、どこからともなく漏れ出てくるタンツバ小水混じりの汚水とともに「用なしな人々」を撮っていた。その路上に打ち棄てられた用なしなものたち、誰が吸ったか分らないタバコの吸殻や誰がたれ流したか分らない汚水は、写真屋の写真の中に、それぞれ絶妙な間合いをもち、用なしな人々を優しい陰影で包みこんでいる。

太古に湿地帯からウジのように湧いてきた異形なものたちは、21 世紀の今もやはりウジはウジのまま。そのウジの屍が何層にも重なりひそむ裏を、アッケラカンとした表の人間が、笑いながら踏みにじりながら徒党を組んで闊歩している。裏も表もウジも湿地帯から湧きでたシダや爬虫類が遠い先祖だということを忘れたかのように。ウジが育ってハエとなり、そのハエが裏のゴミにも、表の笑い顔にも容赦なくたかってくる。しかし、お行儀の良いオモテにとっては、ウジもゴミも残飯も汚水も、所詮遺棄され排泄されたものからの用なしな派生ぶつ。

その遺棄されて用なしになったものたちを、一つ一つ丁寧に愛おしそうに掬い上げ、手のひらからこぼれ落ちないよう白黒の写真にのせた写真屋。タンや吸殻やウジや小便は、太古の昔から用なしな人々のまわりにアメーバのように姿かたちを変えながら優しく包み込むことを知りえていたかのように。その姿は忌み嫌われる異形であればあるほど崇高な美をもった一枚の画となり、誰に見られることもなく静かに佇む。著名な人類学者が秘境の地でようやく見つけた我々のルーツのようなそれを、いともたやすく写真屋は新宿の上に露出させてしまった。しかし、写真屋の行動は確信犯だったのかそうではないのか、今は知るよしもない。